

小学校における音楽の授業の必要性について 歌唱 を中心とした教育法及び指導法

著者	山田 明日美
雑誌名	紀要
号	25
ページ	(227) - (240)
発行年	2023-03-20
URL	http://doi.org/10.32125/00000127

小学校における音楽の授業の必要性について —歌唱を中心とした教育法及び指導法—

About the need of the class of the music in the elementary school A method of education and the instruction method mainly on the song

山田 明日美
Asumi Yamada

抄録：

学校教育の中で音楽の授業というのは必要性があるのか問われることがある。主要教科に対して副教科と区別されているだけでなく、将来何の役に立つのかと実際現場で生徒が口に出しているのを耳にすることがある。しかしながら、学校の音楽の授業では、単なる知識や技能だけでなく、表現することによって子どもたちの感受性を養い、心を豊かにするという人間形成の部分では非常に重要な教科であると言える。中でも小学校はこれから学校で音楽を学んでいく上では土台づくりとしてもとても大事な時期である。

本論文では、小学校における音楽の授業の必要性を分析するだけでなく、音楽科教員として大切なことや音楽の授業の指導で必要なことを検討する。

Abstract:

The class of the music may be called into question in school education whether there is the need. Not only it is distinguished from a vice-subject for main subjects, but also may hear what, actually, a student eats on the site in the future what it is useful for. However, by the class of the music of the school, I develop the sensitivity of children as well as simple knowledge and skill by expressing it, and it may be said that it is the subject that is very important in the part of the human being formation to do a heart wealthily. Above all, the elementary school is the time when they are very important as the making of base in learning music at school from now on.

Not only, in this article, I analyze the need of the class of the music in the elementary school, but also consider whether it is necessary for the instruction of the class of important thing and the music as a music department teacher.

キーワード：小学校、音楽の授業、歌唱

Keyword : elementary school, class of the music, song

1. はじめに

学校教育の中で音楽の授業というのは必要性があるのか問われることがある。主要教科に対して副教科と区別されているだけでなく、将来何の役に立つのかと実際現場で生徒が口に出しているのを耳にすることがある。しかしながら、学校の音楽の授業では、単なる知識や技能だけでなく、表現することによって子どもたちの感受性を養い、心を豊かにするという人間形成の部分では非常に重要な教科であると言える。中でも小学校はこれから学校で音楽を学んでいく上では土台づくりとしてもとても大事な時期である。

本論文では、小学校における音楽の授業の必要性を分析するだけでなく、音楽科教員として大切なことや音楽の授業の指導で必要なことを検討する。

2. 音楽科教育の目的と小学校音楽科教育の目標

音楽は私たちの生活の一部になっており、音楽のない生活は考えられないくらい密接したものである。テレビの番組やドラマなどを見ている、BGMは非常に重要な役割をしており、BGMがあることによつて見ている人の感情を引き出したり、映像をより効果的に感じたりすることができる。世の中には様々なジャンルの音楽が溢れているが、音楽は人々の心に何かを伝えることや感じさせる力があると考えられる。「聞く」ではなく「聴く」と言われるように、音楽は心で感じるものであるからだ。そして聴くことだけでなく、歌うこと、演奏をすること、創作することなどにより、自己表現力を高めることもできる。このようなことから、子どもたちも大抵は音楽が好きである。むしろ音楽自体を全て嫌いな子どもはいないくらいだ。しかしながら、学校での音楽の授業は子どもたちに敬遠されることが多い。果たして音楽を強要することになる授業は効果的なのかという疑問も出てくる。

このように必要性に問われる音楽の授業であるが、そもそも音楽科教育の目的は何だろうか。

「音楽科教育」とは、学校教育において、教科として音楽を教授・学習することを意味しており、「目的」とは、人や組織が成し遂げようとしている自柄である。そして目的を機能させるためにはその目的が達成されたかを客観的に判断することが必要であり、そのために目標が設定されるのである。では、小学校での音楽科教育の目標は何だろうか。

『小学校学習指導要録・音楽科』には、下記の目標が示されている。

表現及び鑑賞の活動を通して、音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育てるとともに、音楽活動の基礎的な能力を培い、豊かな情操を養う。

これは、小学校6年間の音楽科の授業によって、

- ① 音楽を愛好する心情を育てる。
- ② 音楽に対する感性を育てる。
- ③ 音楽活動の基礎的な能力を培う。
- ④ 豊かな情操を養う。

ことを学力として保障することが目標として示されている。

4つの項目に分けてみても、音楽科の目標というのは国語や算数などのテストの点数によって理解度が判断できるものとは違い、特に①②④のように点数に表せないものに関しては、それらが達成されたかどうかを客観的に明らかにすることは非常に困難である。③に関して、ピアノ教室や合唱団などの習い事や音楽活動をしている者だけでなく、小学校での音楽の授業が唯一の音楽学習の場である子どもたちに、音楽科固有の学力を保障しなければならない。しかしそれが音楽科教育の最大の目的でもあり、国が国民に約束した小学校音楽科の最低限度の学力を全ての子どもに確実に体得させなければならないということである。では、それぞれの項目で具体的に音楽の授業の中でどのようなことが必要かを考える。

①「音楽を愛好する心情を育てる」とは、生涯にわたって音楽を好み、一生を通じていつでも自分のそばに音楽があることを望む心を育てることである。小学校の音楽科では、音楽の学習活動を通してこの心を育むことが大切なねらいの一つである。世の中には様々なジャンルの音楽で溢れかえっているが、時代に合わせて新しい音楽が生み出され、私たちもその時代に合わせた音楽に触れ合っていくことになる。その基盤となるのが音楽の歴史であり、これまでに生み出された音楽を知り、聴くだけでなく、実際に歌を

歌ったり楽器を演奏したりする中で音楽の素晴らしさを実感することになる。生涯を通して音楽が好きでいるために、授業の中で子どもたち一人一人が楽しく音楽に関わり、音楽活動をする喜びを得ることが大切である。そのために子どもたちに音楽に対する興味・関心をもたせるような授業内容を考え、意欲や態度を育てていく必要がある。

②「音楽に対する感性を育てる」とは、歌を歌ったり楽器を演奏したりする表現活動や、音楽を聴いたり見たりして受ける音楽的刺激に対する反応である音楽的感受性を育てることである。私たちが生きていく上で知識や理性的な判断力は当然必要であるが、美しいものや自然に感動する温かい感性をもつことも必要であり、音楽から得る感性もそれに通ずると考えられる。他人を思いやる優しい心を持ち、相手の立場を考えて行動できる人間になるためにも、このような温かい感性を育てることは大切である。そのため音楽の授業では、様々なジャンルの音楽に触れ合えるよう、教材選びをよく考えていく必要がある。

③「音楽活動の基礎的な能力を培う」とは、子どもたちが感じたことや思ったことを声や楽器で表現したり、音楽の美しさを感じながら聴いたりすることができる能力を培うことである。もともと人間は音楽を聴いたり表現したりしようとする潜在的な能力をもっていると言われていたが、音楽的な読み書きの知識や、歌で音程やリズムを合わせたり楽器を演奏したりするための技能を体得し、直接的な音楽体験をしていくことで基礎的な能力が身に付く。そのため音楽の授業では、楽典などの音楽の知識を教えること、歌の声の出し方や音程やリズムの取り方を教えること、楽器の演奏の仕方を教えることなど、まずは知識や技能を体得させ、さらに自己表現できるような工夫を考えることも必要である。

④「豊かな情操を養う」とは、①②③の内容を身に付けることによって、同時に得られるという音楽科の特性を示している。「情操」とは、優れたものや尊いものに触れ、美しいものを見た時に感動する豊かな心のことであるが、素晴らしい音楽に触れ、仲間と共に音楽を楽しみ、音楽の喜びを分かち合うことでより感動を味わうことができる。一人でも音楽の楽しさは十分に味わえるが、合唱や合奏など、多くの仲間と一緒に音楽をつくり上げる喜びは、学校でしか味わえないかけがえのないものである。そのため音楽の授業では、単に歌を歌ったり楽器を演奏したりするだけでなく、合唱や合奏なども積極的に取り入れ、より感動を味わえるように内容を考えることが必要である。

この小学校音楽科教育の目標を実現するために、「表現及び鑑賞の活動を通して、音楽的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の音や音楽と豊かに関わる資質・能力」の育成を計画的に行うことが重要である。

続いて、小学校音楽科における学年ごとの目標である。

低学年（第1・2学年）の目標

- ①楽しい音楽活動を通して、音楽に対する興味・関心を持ち、音楽経験を生かして生活を明るく潤いのあるものにする態度と習慣を育てる。
- ②リズムに重点を置いた活動を通して、基礎的な表現の能力を育て、音楽表現の楽しさに気づくようにする。
- ③音楽の楽しさを感じ取って聴き、様々な音楽に親しむようにする。

低学年の子どもたちにとってまず大切なことは、音楽活動を「楽しい」と感じられる音楽の授業をすることである。低学年の子どもたちは歌うことや音楽に合わせて自ら体を動かすことを喜ぶ傾向にあるため、興味・関心を引き出せる指導ができるかどうかにかかっており、意欲的に音楽活動を行えるように計画・準備をする必要がある。

中学年（第3・4学年）の目標

- ①進んで音楽にかかわり、音楽活動への意欲を高め、音楽経験を生かして生活を明るく潤いのあるものにする態度と習慣を育てる。
- ②旋律に重点を置いた活動を通して、基礎的な表現の能力を伸ばし、音楽表現の楽しさを感じ取るようにする。
- ③音楽の美しさを感じ取って聴き、様々な音楽に親しむようにする。

中学年の子どもたちにとって音楽の授業は、全ての音楽活動を活発にし、自ら進んで参加できるようなものでなければならない。中学年の子どもたちは心身の発達も著しく、リズム感の発達や旋律の美しさに対する感受性も増していくため、知識的なことを教えることも必要になってくる。

高学年（第5・6学年）の目標

- ①創造的に音楽にかかわり、音楽活動への意欲を高め、音楽経験を生かして生活を明るく潤いのあるものにする態度と習慣を育てる。
- ②音の重なりや和声の響きに重点を置いた活動を通して、基礎的な表現の能力を高め、音楽表現の喜びを味わうようにする。
- ③音楽の美しさを味わって聴き、様々な音楽に親しむようにする。

高学年の子どもたちにとって音楽の授業は、自分の思いを表現するために自分で考え判断し、創造的に音楽活動をするための機会が必要である。高学年の子どもたちは豊かな響きのある声で歌えるようになり、社会性の発達に伴い、合唱や合奏の活動など協力しながら音楽表現の仕方を工夫したりもできるようになる。また、個人によって音楽的能力の差も生まれるため、指導の仕方や授業内容をより工夫していく必要がある。

小学校音楽科教育の目標を達成するためには、子どもたち一人一人が楽しく音楽に関わり、音楽活動をする喜びを得られるような音楽科教員としての指導法が重要になってくる。そして目標を達成することが心豊かな人間形成へとつながり、本来の音楽科教育の目的にも近づくことができるのである。

3. 音楽科教員の役割と小学校音楽科教員に求められるもの

音楽の授業の必要性に問われる中、教員の中でも音楽科というと影の薄い存在になりがちで、肩身の狭い思いをすることも多い。音楽は実技教科であるため、座学以外に活動させるという面では授業を成り立たせるのが非常に難しいこともあるが、苦労を理解してもらいにくい。しかしながら小学校や中学校においては、合唱指導などで音楽科教員が活躍する場が与えられることもある。音楽科教員は芸術家であり、心を育てる情操教育を手助けするという重要な役割をもっている。

小学校では、中学校や高等学校の教科担任制とは異なり、学級担任としての音楽指導が可能である。しかも、新鮮で柔軟な音楽的感性を備え、心身の発達の著しい小学校における音楽指導者の存在は、子どもたちの成育に大きな影響を与えるものである。子どもたちにとって、音楽の活動を共に楽しみ、新しい音楽の楽しさを教えてくれる教員は魅力的であり、子どもたちとの信頼関係も築きやすくなる。しかし、学級担任は音楽指導に消極的になりがちである。高学年は音楽専科が担当することもあるが、低学年は学級担任が音楽の授業を受け持つことが多い。音楽が専門外の教員にとっては、音楽指導をすることに抵抗があるが、音楽の要素や音楽の仕組みについての知識を与え、それらを活用し創造的に自分の音楽をつくり出せるように指導するための授業計画を念入りにすることが大切である。

音楽科教員に求められる力としてまず挙げられるのが実技能力である。実技教科としての音楽科教員の特徴的な資質は「音楽技能」であり、音楽を伝える教員として大切な力である。しかし、音楽的な技能や

知識のみでなく、一般の教員に求められる力も当然必要であり、さらに小学校においては、全ての教科を指導するための能力も兼ね備えていなければならない。

音楽科教員として必要な教員力向上のためには、「授業力・指導力・人間力」の3点をバランスよく、場と時に応じて総合的に発揮していく力が必要である。これら3点は、教育実践家としての基本的な力であり、身に付けるべき専門的な指導力でもある。

音楽科教員の指導力形成にかかわる3方向（教育出版：『小学校音楽科教育法』より）

◎音楽授業の成立

- ・幅広い音楽観・授業構成力
 - ・子どもたち主体の学習指導と評価
- ↓
- ・題材構成の工夫と教材観の広がり
 - ・指導内容を明確にした授業づくりの力量

◎音楽指導の成立

- ・音楽性・実技能力の充実
 - ・音楽実技体験・音楽知識の質と量
- ↓
- ・教員から子どもたちへの技能と知識の音楽感覚育成に比重をおいて音楽活動を重視
 - ・楽曲研究主義

◎人間形成に迫る実践構想力

- ・幅広い音楽教育観の形成
 - ・教育目的との一体化
- ↓
- ・教科の存在へのダイレクトなつながりを構築する教科経営
 - ・子どもたちの生涯にわたり生活に生きる音楽力育成
 - ・学習状況の適切な評価と指導

このように学校教育における音楽科教員、中でも学校教育での基盤である小学校の音楽科教員は、生きる喜びや安らかさを与え、心を豊かにしていく音楽の役割を教える重要な存在である。音楽を伝えるには教員の人間性が音楽的に磨かれなければならない。小学校音楽科教員の音楽に対する高い意識によって、子どもたちに音楽の良さを伝え、個々だけでなく集団としての豊かな生き方を、生涯身に付けていくことになる。そのために、音楽の授業の内容を具体的に計画し、より良い授業づくりを目指したい。

4. 小学校音楽科教員養成コア・カリキュラム

小学校音楽科教員になるためのコア・カリキュラムとはどのようなものか。

（※文部科学省委託 教科教育モデルコアカリキュラム策定事業より）

[1] 音楽科の指導法

<全体目標>

小学校音楽科における目標、育成を目指す資質・能力及び指導内容について理解するとともに、児童の学習の実際や様々な学習の指導方法に基づいた授業づくりの方法を身に付ける。

<学習内容>

1. 授業実践に必要な知識・理解

(1) 小学校音楽科の教育目標や指導内容

◎一般目標

学習指導要領に示された小学校音楽科の目標や指導内容を理解する。

◎学習項目

①小学校音楽科の意義と、教科書の変遷

到達目標：小学校音楽科の意義と、教科書の変遷を理解している。

②小学校学習指導要領（音楽）

到達目標：小学校音楽科の教育課程（カリキュラム）の全体構造を理解している。

③目標・指導内容

到達目標：各校種等との連携を念頭に置き、学習指導要項要領における小学校音楽科の目標、育成を目指す資質・能力、指導内容を理解している。

④小学校音楽科の背景となっている関連諸学問や領域

到達目標：関連諸学問の理解に基づき、小学校音楽科の指導内容を構造的に理解している。

⑤生活や社会の変化と児童の実態

到達目標：小学校音楽科の内容を指導する際に留意すべき、生活や社会の変化、児童の実態などについて理解している。

(2) 児童の学習の実際や特徴及び学習評価

◎一般目標

小学校音楽科における児童の学習の実際や特徴について理解するとともに、学習評価の在り方について理解する。

◎学習項目

①児童の発達や学習

到達目標：小学校音楽科における児童の学習の実際や特性を理解している。

②学習評価

到達目標：小学校音楽科における評価の観点、学習評価の在り方について理解している。

③個々の児童の理解と対応（他教科との関連を含む）

到達目標：児童理解に基づく適切な対応の仕方について理解している。

2. 授業実践

(1) 指導技術

◎一般目標

小学校音楽科の授業実践に必要な指導方法を身に付ける。

◎学習項目

①小学校音楽科における学習の特性に応じたICT等の活用

到達目標：小学校音楽科の特性に応じて、授業においてICT等を適切に活用できる。

②小学校音楽科における学習の特性に応じたコミュニケーション技法

到達目標：児童の発達や学習状況に応じた適切な表現を用い、対話することができる。

③小学校音楽科における学習の特性に応じた学習集団の組織

到達目標：小学校音楽科の学習の特性に応じた適切な学習集団を組織することができる。

④小学校音楽科における学習の特性に応じた学習活動の構成

到達目標：小学校音楽科の学習の特性に応じた適切な学習活動を構成することができる。

(2) 授業づくり

◎一般目標

授業づくりの方法を身に付け、自ら授業改善に取り組むことができる。

◎学習項目

①教材研究

到達目標：目的に応じた教材研究ができる。

②指導計画（学習指導案等）

到達目標：学習到達目標に基づいた指導計画について理解し、学習指導案を作成することができる。

③授業改善

到達目標：模擬授業の実施とその反省を通して、授業改善の視点を身に付けている。

<学習形態>

①授業観察：小学校の授業映像の視聴や授業の参観

②模擬授業：1単位時間（45分）の授業あるいは特定の活動を取り出した模擬授業

③講義（小集団でのディスカッションなどを含む）など

[2] 音楽に関する専門的事項

<全体目標>

小学校における音楽科の授業実践に必要な、生活や社会の中の音や音楽と豊かに関わる資質・能力を育成する能力と、音楽科に関する背景的な知識・技能を身に付ける。

<学習内容>

1. 授業実践に必要な音楽的能力と音楽科に関する背景的な知識・技能

(1) 授業実践に必要な音楽的能力

◎一般目標

小学校における音楽科の授業を担当するために必要な、生活や社会の中の音や音楽と豊かに関わる資質・能力を育成する能力を、授業場面を意識しながら身に付ける。

◎学習項目

①曲想と音楽の構造などとの関わりについての理解と、表したい音楽表現をするために必要な技能の習得を促す力

到達目標：曲想と音楽の構造などとの関わりについての理解と、表したい音楽表現をするための習得を促す力を身に付けている。

②音楽表現を工夫したり、音楽を味わって聴いたりすることを促す力

到達目標：音楽表現を工夫したり、音楽を味わって聴いたりすることを促す力を身に付けている。

③音楽に親しむ態度を養い、豊かな情操を培うことを目指し、音楽活動の楽しさの体験を促す力

到達目標：音楽に親しむ態度を養い、豊かな情操を培うことを目指し、音楽活動の楽しさの体験を促す力を身に付けている。

(2) 音楽科に関する背景的な知識・技能

◎一般目標

幼・小・中学校の接続を踏まえながら、小学校音楽科の授業を担当するために必要な知識・技能を身に付ける。

◎学習項目

①音楽表現に関する知識・技能

到達目標：音楽表現に関する知識・技能を身に付けている。

②鑑賞に関する知識

到達目標：鑑賞に関する知識を身に付けている。

③「共通事項」に関連する知識

到達目標：「共通事項」に関連する知識を身に付けている。

④我が国や諸外国の音楽に関する知識・技能

到達目標：我が国や諸外国の音楽に関する知識・技能を身に付けている。

[3] 小学校音楽科教員養成課程で扱う項目

<全体目標>

音楽科の授業を実践するためのより高い指導力を身に付ける。

1. 専門的な知識・技能

◎学習項目

①音楽教育理論についての知識

②声楽（合唱及び日本の伝統的な歌唱）についての知識・技能

③器楽（合奏及び伴奏並びに和楽器）についての知識・技能

④指揮法についての知識・技能

⑤音楽理論、作曲法（編曲）及び音楽史（我が国及び諸外国の様々な音楽）

⑥音楽鑑賞、音楽文化に関わる知識

⑦カリキュラムについての知識

⑧教材についての知識

2. 専門的な指導技能

◎学習項目

①歌唱分野の指導

②器楽分野の指導

③音楽づくり分野の指導

④鑑賞領域の指導

5. 小学校音楽科の授業の指導内容と授業づくり

小学校音楽科教員養成のためのコア・カリキュラムの内容を踏まえ、実際に小学校音楽科の授業の指導内容や授業づくりではどのようなことが必要になってくるのだろうか。

音楽の授業で何が一番大切かということ、子どもたちが「楽しい」と感じることができるかということであり、「今日の音楽の授業は楽しかった、次が楽しみだ。」と感じてもらえるかどうか重要である。しかもそれは表面的な楽しさばかりの授業ではなく、中身の詰まった、充実した本物の「楽しい」授業をつくらなくてはならない。しかし、音楽の授業を成立させることは他の教科よりも難しいと言われている。音楽は「音」を用いて授業するため、子どもたちも開放的になり、私語や物音などの非常音などが授業妨害になることが多い。そして音楽的な能力だけでなく、音楽に興味がなく、やる気がないような子どもたちを惹きつけるような授業ができないと、やる気のある子どもたちとの差が生まれてしまい、合唱や合奏などの集団で行う授業が上手く進められないこともある。他の教科では味わうことのできない「一体感」や

「達成感」を感じるためには、子どもたち全員に授業の目標を達成させるための専門性や、音楽の授業を成立させるための「知識・技能・経験」が必要である。

そのため、まずは小学校音楽科の指導内容をよく理解しておく必要がある。

小学校音楽科の指導内容（学習指導要領より）

A 表現

(1) 歌唱の活動を通して、次の事項を指導する。

- ア：音楽を聴いたり楽譜を見たりして歌うこと
- イ：歌詞の内容や曲想を感じ取って歌唱表現を工夫すること
- ウ：呼吸や発音など歌い方に気を付けて歌うこと
- エ：友達の声や伴奏を聴きながら声を合わせて歌うこと

(2) 器楽の活動を通して、次の事項を指導する。

- ア：音楽を聴いたり楽譜を見たりして楽器を演奏すること
- イ：楽曲の曲想を感じ取って器楽表現を工夫すること
- ウ：楽器の音色や演奏の仕方に気を付けて器楽表現すること
- エ：互いの音を合わせて演奏すること

(3) 音楽づくりの活動を通して、次の事項を指導する。

- ア：様々な音と直接的にかかわり、音のおもしろさに気づいたりその響きや組み合わせを楽しんだりしながら、様々な発想をもって音遊びをしたり即興的に表現したりすること
- イ：音を音楽に構成していく過程を大切にしながら音楽の仕組みを生かして自分の音楽をつくること

(4) 表現教材は次に示すものを取り扱う。

- ア：歌唱教材選択の観点
- イ：器楽教材の観点
- ウ：各学年で取り扱う歌唱共通教材

B 鑑賞

(1) 鑑賞の活動を通して、次の事項を指導する。

- ア：楽曲の曲想を感じ取って聴くこと
- イ：音楽を形づくっている要素のかかわり合いを感じ取って聴くこと
- ウ：楽曲の特徴や演奏のよさを理解して聴くこと

(2) 鑑賞教材は次に示すものを取り扱う。

- ア：いろいろな種類の音楽の中から、子どもの発達段階や実態にふさわしい教材
- イ：音楽を形づくっている要素の働きを感じ取りやすく、聴く楽しさや喜びを味わいやすい教材
- ウ：楽曲の特徴や演奏の楽しさ、魅力を感じ取ることができるような教材

[共通事項]

(1) 「A表現」及び「B鑑賞」の指導を通して、次の事項を指導する。

- ア：音楽を形づくっている要素を聴き取り、その働きを感じる
- イ：音符、休符、記号や音楽にかかわる用語を理解すること

上記の通り音楽の授業は「表現」と「鑑賞」の2領域であるが、「歌唱・器楽・音楽づくり・鑑賞」と分野が分かれている。多様な音楽を通して、子どもの発達段階を考慮し、6年間の指導計画を作成することが極めて重要である。そして指導計画と同時に、評価計画を作成しなくてはならない。指導と評価は表裏一体であり、指導後の評価によって次の指導につながるからである。また、評価は教員だけでなく、子どもたち自身も自分の成長を自ら実感でき、次への意欲につながっていく。

音楽科の評価の観点（※趣旨は学年によりさらに具体的に表されている）

◎音楽への関心・意欲・態度

（趣旨：音楽に親しみ、音楽をすすんで表現し、鑑賞しようとする）

◎音楽的な感受と表現の工夫

（趣旨：音楽のよさや美しさを感じ取り、それらを音楽活動の中で創意工夫し生かしている）

◎表現の技能

（趣旨：音楽を表現するための基礎的な技術を身に付けている）

◎鑑賞の能力

（趣旨：音楽を楽しく、聴取、鑑賞し、そのよさや美しさを味わう）

評価の観点は、自ら学ぶ意欲や思考力、判断力、表現力を含めた、子どもたちの学習状況の適切な評価が求められている。そしてこの観点は、実際の授業でどのように評価していくのかを具体的にして、指導と評価の計画等を作成し、音楽科としての学びや子どもたちの成長を明らかにしていく必要がある。

では、実際にどのような音楽の授業を計画すれば、子どもたちが「楽しい」と感じ、生き生きと音楽活動を進め、心豊かに成長していくのだろうか。音楽の授業は、子どもたちが生き生きと歌い、楽器を演奏し、音楽を聴いて身体表現をするなど、進んで音楽活動を楽しみながら、生きる喜びを味わう時と場にならなければならない。そしてそれは子どもたちが音楽との関わりを通して豊かに自己表現を図っていく学習の課程でもあり、一人一人が自分なりの感じ方、考え方、生き方などの自分の思いに基づいて、自ら感じ取ったり、考えたり、判断したり、工夫したりして表現できるような、創造的な音楽活動を展開できるようにする必要がある。音楽の授業は、子どもたちが積極的に参加して初めて成立するものであり、そのように積極的に参加できるような「楽しい」授業をつくるためには、年間指導計画と毎時間の学習指導案の作成が不可欠である。まずは子どもたちに身に付けてほしい資質や能力を明確にし、そのための適切な題材を設定し、ねらいや指導目標を明らかにすること、そのうえで子どもたちが積極的に関わられるような適切な教材を選択し、具体的な学習内容を用意することが重要である。

年間指導計画は、低学年・中学年・高学年の各目標や評価の観点を踏まえ、学習指導要領の「A表現」「B鑑賞」「共通事項」についての内容がどうか、時数の取り方や題材を構成する教材はどうか、実施時期はどうかなどを考察する必要がある。1年間の学習活動全体を見通したバランスを考えて調整することも大切ではあるが、小学校6年間全体を見通して、小学校の音楽科で身に付けたい力の実現に向けられた年間指導計画であるかを考えて作成することも大切である。

学習指導案は、子どもたちに「何を教えようとしているのか（指導内容）」「どのように教えようとしているのか（指導方法）」を、教える子どもたちを思い浮かべながら、確認していくために作成する。それは考えをまとめながらシナリオを作り、授業を行う前に、頭の中でシミュレーションするために使うものである。指導案を作成することにより、毎時間の授業での目標や、「導入・展開・まとめ」を明確にし、どのような時間配分で授業を進めていくのかなど、1時間の授業を濃くて充実したものにするという教員自身の自信にもつながる。しかし、実際の授業で全て指導案の計画通りに進められるとは限らない。同じ内容でもクラスの実態によっては上手く進められず、中途半端に終わってしまうことも多い。指導案は目安のものであり、クラスの実態やその場の状況に臨機応変に対応していく力も必要になってくる。

6. 小学校音楽科の授業での歌唱指導の重要性と指導法

人間にとって「歌」とは生活の一部である。声は個人のアイデンティティであり、さらに「歌う」という行為は、一人一人の人間に備わった心と身体から発する最も自分らしい音楽表現とも言える。そもそも、

歌うことが嫌いな人間はいるのだろうか。歌唱は歌詞というメッセージを旋律に乗せて伝えるコミュニケーションであり、声あまり出せないとか音痴であるとかの苦手意識はあるにしても、歌うこと自体が嫌いな人間はいないはずである。

では、「歌唱指導」の意義とは何だろうか。学校教育の中では、音楽の教科書においては大半が歌唱教材であり、合唱コンクールなど多くの学校行事で重要な役割を果たしていることから、歌唱は音楽科カリキュラムの中心的活動と言える。しかし、歌唱は実際の学校の現場では、授業で全く声を出さなかったり、音程やリズムなどが取れないまま歌っていたりと、様々な問題を抱えている。また、教員が細かく指導をしすぎることによって、歌う喜びを味わえない子どもたちも多い。よく、音楽自体は大好きであっても、音楽の授業は嫌いと言われてしまうのは、こうした教員の過度な押し付けが原因となってしまう。歌唱活動の場で大切なことは、自分の表現に対して、肯定的になれるきっかけや経験をいかにもつことができるかである。子どもたちが歌う喜びを味わうとともに、音楽と共に生きることを意味を見出すためには、どのような歌唱指導を行うのが重要である。

中でも小学校での歌唱指導は、子どもたちが生涯にわたり音楽に積極的に関わるための土台づくりという重要な役割を担っている。小学校の6年間で基礎的な表現技能を養うと同時に、歌唱活動の楽しさや喜びを十分に実感できる時期であれば、一生を通して主体的な歌唱活動、そして音楽活動ができるようになると言える。こうしたことから音楽科教員は、子どもたちが身体的にも精神的にも著しく発達する6年間の中で、歌唱が子どもたちの内面を成長させる活動となるように指導することが求められている。

では、どのような意識をもって歌唱指導に取り組むべきか。まずは「自己表現としての歌唱」である。歌唱は、それぞれの人の身体そのものを楽器とする音楽行動であり、出される音は全て歌唱者自身の身体面、精神面と密接に関わってくる。誰一人として同じではなく、一人一人の個性が現れるのが歌唱である。そのため、まずは子どもたち一人一人の声を尊重し、自分自身の声を肯定的に捉えられるように導く必要がある。自分の声が好きになれず他人の声をうらやましく感じることもあるが、他人から認められると自信もついてくるようになる。そして、「楽しい」と歌唱の場面で子どもたちが感じられるような雰囲気づくりが何より重要である。強制されると子どもたちは苦痛を感じ、授業の中で歌うことを拒否するようになる。子どもたち一人一人、自己表現が十分にできる歌唱指導を考えなければならない。

そしてもう一つは「他者との関わりの中での歌唱」である。小学校では、1人で歌うことより、斉唱や合唱などグループやクラス全体で歌うことが多い。音楽の授業以外でも、学校行事における歌唱活動の場面が多く、他者と一緒に歌うことにより、音楽的感動を共有できる機会となっている。他者と歌声を合わせるためには、自分自身の歌声と他者の歌声を聴かなければならない。「合唱は心と心を合わせなければ成立しない」と言われるが、子どもたちが意識的に自分自身の歌声や他人の歌声を聴こうとできるかが大切である。仲間と一緒に心を合わせて歌うことは、集団性や協調性を育むためには重要である。このことはクラスの状態にも深く関わってくるため、特に小学校では学級担任が音楽の授業をすることもあり、学級経営をする上でも合唱は有効的である。クラスの中で歌うことを拒否するような子どもが一人でもいると合唱は上手くいかないことが多いため、クラスの状態に応じた歌唱指導を考えなければならない。

続いて、歌唱指導の基礎技術である。子どもたちは、基本的には歌うことが大好きであり、音楽の授業においても歌唱の学習は、気軽に楽しむことができる活動になっている。しかし、歌唱の活動は、子どもたちの心情面に大きく関わるため、子どもたちの気持ちを大切にしながら、丁寧に授業を進めていくことが大切である。決して強要して無理矢理押し付けてはいけない。子どもたちがのびのびとした声を出し、それぞれが思いをもって歌うことで自己表現できるよう、音楽科教員としてどのように指導していくべきか考える必要がある。そして小学校では子どもたちの発達段階に応じて歌唱指導も変えていく必要がある。

低学年における歌唱指導は、技術よりも心情に訴えるような指導が必要である。まずは楽しさを感じながら元気よく大きな声で歌いたい。歌うことが大好きになることを最も大切にしたい低学年の歌唱指導では、子どもたちの心情面に働きかける言葉がけが大変有効である。音楽科教員は歌のお兄さんやお姉さんのような存在になり、表情豊かに子どもたちに語りかけ、歌詞からイメージを広げながら楽しく授業を進めることが重要である。また、音楽を感覚的に捉える傾向が強いため、身体表現を伴いながらリズムを捉えたり、歌の表情を表現したりする授業も取り入れていくべきである。そして歌唱の導入としても、子どもたちにとって身近で親しみがわくような楽曲を選んで教材としていかなければならない。

中学年における歌唱指導は、子どもたちの歌声の幅を広げ、低学年のように元気よく大きな声で歌うだけでなく、この時期の子どもたちが秘めている美しい声を、無理なく引き出し、訓練的にならず、子どもたちが自然に身に付けていくような指導を心がけなければならない。地声と裏声の違いを理解し、頭声域を中心とした歌い方ができるような正しい発声を身に付けられるような指導が必要である。そして斉唱で歌うだけでなく、歌声を重ねて合唱することの素晴らしさや楽しさを味わうことができるよう、輪唱や簡単な2部合唱を導入として授業に取り入れていくことも必要である。

高学年における歌唱指導では、自らの歌声の特徴に気付き、楽曲の特徴や演奏形態に合わせて、歌声を使い分けたり、工夫したりしながら、歌唱活動に取り組めるように指導していく必要がある。高学年になると子どもたちの声も安定し、しっかりとした合唱曲に取り組むことができるようになるため、充実した歌唱活動が展開できるようになる。しかし高学年になると、歌うことへの恥ずかしさやクラスの状態などによっては積極的に歌わなくなってしまう子どもたちも出てくる。男子では変声期を迎える子どもも出てくるため、歌うことで高学年のプライドを傷つけたり、挫折感を味わわせたりしないよう、音楽の授業では指導の仕方や教材選びなど、中学年まで以上に十分な配慮が必要である。

学校の音楽教育のカリキュラム指針である学習指導要領では、歌唱指導において音楽科教員にどのような指導能力を求めているのか。まずは声を出して歌を歌う喜びの原点を忘れることなく、子どもたちと共同で音楽をつくり上げているという気持ちを忘れずに指導に臨み、音楽科教員は音楽学習のプロフェッショナルであることを自覚して取り組まなくてはならない。

歌唱指導には聴唱法と視唱法があるが、小学校ではまずは聴唱法がほとんどであり、教員の範唱の技能がとても重要になってくる。CDなどを聴かせて歌わせようとする教員も多いが、自らが進んで声を出し、楽しそうに歌うことが、子どもたちの「歌おう」というモチベーションにもつながってくる。教員の歌声が子どもたちのお手本になるよう、教員自身が音程やリズムを正しく、美しい響きのある豊かな発声と幅広い表現力で、自信をもって歌うことが必要である。もちろんピアノで旋律を弾くこともあるが、ピアノの音だけでなく、教員が子どもたちの前で実際に歌って聴かせる音色が、音程を確認するためにも最も聴きやすい音色である。さらに教員はピアノ伴奏をしながらも、「子どもたちと一緒に歌う」という「弾き歌い」ができなければならない。学級担任が音楽の授業を受け持つ場合、CDの伴奏を流すことに偏ってしまいがちであるが、ピアノ伴奏の技術は音楽科教員には必要な能力である。CDの伴奏は間違えることはないが、子どもたちに合わせることはできず、その場に応じた歌いやすい伴奏をするためには、教員自身が伴奏する必要がある。しかし、弾き歌いをするにより、ピアノを弾くことに熱中して歌が疎かになってしまったり、ピアノの音が大きすぎて教員の歌声が聞こえなかったりと、様々な問題が発生する。さらには弾き歌いしながらも常に子どもたちの様子を見なければならないため、全てに気を配るのは難しいことであるが、教員の歌声は子どもたちをリードし、歌う際の表情や口の開け方などもお手本となる。そのため、教員が子どもたちの前で表情豊かに歌い、明るく楽しい雰囲気をつくるのが、どんな指導法よりも効果的である。

歌唱指導における重要性や発達段階に応じた指導法、そして音楽科教員として必要なことを理解した上で、「発声・技能・表現」のそれぞれの指導法はどのようなものか。

「発声」における指導法としては、まずは「正しい姿勢」を教えること、そして「自然で無理のない発声」を体得させるための腹式呼吸などの「呼吸の仕方」などを教えることが大切である。小学校での歌唱評価では「大きな声＝すばらしい歌声」となりがちであるが、「美しい声」で歌うことは音楽での自己表現においては重要なことである。もちろん、大きな声で一生懸命に歌っていることに対しては意欲を十分に評価したい。しかし、そこだけに固執してしまうと、音楽の本来の目標が達成されず、音楽的な感性を身に付けることができない。声を出すことに必死になってしまえば、歌を歌う意味がなくなってしまう。そのため、頭声域を中心とした「自然で無理のない発声」を体得させるような指導を考えるべきである。「正しい姿勢」は、よく音楽の教科書などにも写真や絵が載っており、子どもたちも視覚的になんとなく理解することはできる。背筋をまっすぐにして立ち、足は肩幅、手は真横におろす、顎は引くなど、様々な注意点がある。しかし、子どもたちの身体を固めてしまうことなく、自然にまっすぐ安定した姿勢で立てるように、実践を交えながら教えていく必要がある。場合によっては適度に身体を動かしながら歌うこともある。より良い歌を歌うための「無理のない発声」をつくるためには「無理のない姿勢」が大事であることを理解させることが重要である。「呼吸の仕方」は、腹式呼吸がよく用いられるが、無理にお腹を動かすことや力を入れることばかりにこだわらず、身体のを抜いた状態で息を吐き切り、音を立てないように静かに口と鼻から吸うと、自然とお腹が膨らむということを、実践を交えながら教えていく必要がある。身体をリラックスさせ、自然に腹式呼吸できるように、息を吐く練習することから始めるべきである。「口を大きく開ける」ことも、「口に指を3本入れるくらい」とよく言われているが、口の開けすぎで顎関節症を引き起こしかねないため、口の中や喉を開くことが重要である。

「技能」における指導法としては、音程を正しく取るための訓練や、リズムに合わせて歌えるような感覚を掴むことができるように教えることが大切である。学習指導要領の中にも、楽譜通りに正確な音程とリズムで歌わせ、伴奏や自分の歌うパート以外を聴きながら歌わせることが求められている。そのため、発達段階に応じた楽曲選びや、歌いやすい調に移調するなどの工夫も必要である。また、日本語の発音にも十分に注意し、音としての言葉に対する感性を豊かにするため、話しているときの発音を生かして歌えるようにする。技能の体得のためには、音楽科教員自身が伴奏や他声部を聴きながら正確な音程とリズムで歌うことができなければならない。そして、児童が間違っただけで歌ったり、声を合わせたりすることができないときに適切な注意や指導ができることが必要である。

「表現」における指導法としては、子どもたち一人一人がそれぞれの楽曲をどのように歌いたいかという思いをもち、自由に表現できるようにすることが大切である。よく「歌詞を大切に」などと指導することがあるが、言葉をはっきりと発音することだけに固執してしまうと、曲想に合った歌い方を無視し、本来の歌に必要な「なめらかに美しく歌う」ことすら忘れてしまうことになりかねない。自由な表現が大切とはいえ、それぞれの楽曲の曲想に合った表現を考えさせることも大切であり、その楽曲の背景や歌詞の意味をよく理解させてから歌えるように指導するべきである。

小学校音楽科の授業での歌唱指導の指導法については、子どもたちの発達段階に応じた題材をよく考え、それに合った教材選びをすることが重要であり、歌唱を通して音楽の授業が楽しく感じられるような内容を考えなければならない。そして、まずはどんな声でも安心して歌えるような授業の雰囲気づくりをし、少しの伸びも見つけ出してほめてあげること、このほめる言葉の積み重ねが、子どもたちの大きな意欲とモチベーションにつながるのである。音楽の授業では、歌で始まり心と身体の準備をし、歌で終わり「次の授業が楽しみだ」と子どもたちが自然に感じられるよう、歌唱が定着したものになることを願う。

7. まとめ

本論文では、小学校における音楽の授業の必要性を分析するため、学校教育における音楽科の現状について様々な観点から検討してきた。その結果、音楽科教育は自分にとっても今までの認識以上に奥が深く、学校教育の中で子どもたちが知識や技能を得ることだけでなく、人間として成長していくために重要な心の情操を得るためには最も必要であることが分かった。まさしく、最初に述べたように、心を豊かにするという人間形成に当てはまっている。そして、そのために音楽科教員として大切にしなければならないことや必要なことが数え切れないほど多くあり、学校の中で音楽科教員がどれだけ重要な存在であるかも再認識できた。影が薄いか肩身が狭いなどと考えるべきではない。特に小学校での音楽の授業は、6年間で歌唱を中心に多くの経験をし、その中で多くのことを体得し、身体の発達とともに人間としての心を成長させ、中学校という新たな段階へとつながっていくための土台づくりとなる。そのため、これからより一層小学校での音楽の授業を発展させるためにも、小学校音楽科教員としての資質や能力をより多く身に付けるために、今後も教員養成のためのコア・カリキュラムを検討していくことが重要であると言える。

引用・参考文献

- ・初等科音楽研究会編『初等科音楽教育法 小学校教員養成課程用』音楽之友社
- ・宮野モモ子・本多佐保美編『小学校音楽科教育法—創造性あふれる音楽学習のために—』教育出版
- ・有本真紀・阪井恵・山下薫子編『教員養成課程 小学校音楽科教育法』教育芸術社
- ・吉富功修・三村真弓編著『小学校音楽科教育法 学力の構築をめざして』ふくろう出版
- ・川池聰著『小学校新音楽科授業の基本用語辞典』明治図書
- ・文部科学省委託『教科教育モデルコアカリキュラム策定事業』

山田明日美